

「挑戦と希望の地域支援&他機関との連携」振り返り

瀬戸口 康成

私は、イベントを主催する NPO 法人の理事ですが、語ルシストの会には参加したことがなく、イベントの企画には関わっていませんでした。

それでも、当日、私は、真っ先に手を挙げて質問してしまいました。

事前に、小林代表と話してる中で、連携の部分に関して、制度で対応できる方と狭間にあることで制度上対応できない方に対して、格差のない支援をするにはどうするか、という話になりました。

事業者は、利用者が医療保険や介護保険に加入していなければ報酬として算定できない。それでは、支援を継続するのが厳しくなるので、その部分を、市単独事業でみるようにできないか、その道筋が見えるようにできないかと考えるようになりました。

パネルディスカッションの中では、制度上の報酬の対象外の方への支援は、継続が厳しいこと、生活状況が悪化する前に対応することで、地域全体の健康寿命が延びることなどの発言がありました。

嶋田市議の発言は、1日17回のおむつ交換が必要な重度な方への補助で、おむつの支給要件に、「複数の要件のうちの一つでも満たさないと認められない」と、示されている要件のうちの一つが満たしていないので対象外ということをや切々と訴えるものでした。

私の質問は、訪問看護で、その人の健康状況が悪化する前に対応すれば、地域の健康寿命を延ばすことになるという話があったこと、嶋田市議が、行政の予算の大切さを話されたことを受けて、国は、制度化する前にモデル事業を実施して、モデルの間はうまくいくが、制度化されると、谷間だらけになってしまう。

だから、制度に谷間ができる。谷間に対応する方法として有効なのは、市町村が調査事業として取り組むこと。市町村単独で、谷間部分の対応に助成し、その成果で、将来の地方の財政負担が、どのくらい軽減されるかを試算する。軽減効果が大きい時は、市町村の調査事業を拡大する、それほどでもない場合は、国に制度の改善を要望するという提案でした。

いきなりの飛躍した質問は、個人の意見と思われたかもしれませんが、思わず発言してしまうほど、語ルシストの会のメンバーの取り組みは素晴らしいし、

継続できる仕組みを作って、支援活動が続けられたらと思いました。

今回のイベントの基本となった勉強会に、今後、参加させてもらおうと思っています。